

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【大谷中学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	学力と生活習慣等の調査において、「1日あたりどれくらいゲームやSNS、動画視聴をしますか」という質問では、弱い負の相関がみられる。また、授業外でICTを活用してどのくらい勉強しているかという項目が同様に弱い負の相関であり、慢性的な電子機器依存やICTの使い方などが学習状況調査の結果に影響していると考えられる。そのため、ICTの使い方考え直すとともに、生徒自らが主体的に継続して取り組めるよう個別最適の学びを充実させていきたい。また、チャレンジスクール等、地域との連携を図りながら、学習意欲を高める環境づくりを行う。
思考・判断・表現	学力と生活習慣等の調査において、理科や数学について肯定的な回答をしている生徒は学習状況調査における他の教科でも正答率が高い。一方で、国語や社会に関する肯定的な回答と他教科の正答率との間には相関がみられなかった。以上のことから、理数科目に対する取り組みの強化や支援によって、全体的な正答率、ひいては学力の向上を目指していく。また、④を踏まえて、「学び合い」の継続や話し合い活動をより充実させ、学力の向上につなげていく。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<p><学習上の課題> 基礎的・基本的な知識・技能の習得状況が二極化している。</p> <p><指導上の課題> 習得した知識・技能を活用する学習を、全体指導で設定しづらく、また個別指導が十分に確保できない。</p>	⇒ 習熟度に応じたプリントを準備する等、個別最適な学びの実現に努める。【毎日】 スクールアシスタントが授業に入り、個別指導等のサポートをする。【毎日】 テスト前に学習会や質問会を実施する【定期テストごとに実施】 ドリルパークやスタディサブリなどを活用する機会を増やしていく。【長期休業期間中】
思考・判断・表現	<p><学習上の課題> 「思考・判断・表現」の記述式問題の正答率が二極化している。</p> <p><指導上の課題> 知識・技能に二極化がみられるため、授業時間内での個別指導が十分に確保できない。</p>	⇒ 生徒自身の振り返りの時間を行い、前時の授業との連続性を持たせていく。【毎日】 スクールアシスタントが授業に入り、個別指導等のサポートをする。【毎日】 オウリング等を活用した「学び合い」を継続して行っていく。【毎日】 学級活動における話し合い活動を充実させ、思考力・判断力・表現力を向上させる手立てとする。【年間】

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	B	スクールアシスタントが授業に入り、各教科担当と連携を取りながら支援を行った。国語や数学等でチームティーチングに力を入れている。個別最適な学びの実現のため、生徒一人ひとりのことを考えた声掛けを行っている。長期休業中にスタディサブリで課題を設定した。習熟度に応じたプリントも準備して、生徒が自分で選択して取り組みを行っている。テスト前に学習会や質問会も実施し、生徒が申し込んでいる状況である。
思考・判断・表現	B	学級開きや行事等に関連させて、学級活動における話し合い活動を実施した。話し合い活動で決まったクラスの約束などを教室内に掲示し、話し合い活動を学校生活に繋げている。スクールアシスタントが授業に入り、個別支援を行った。国語や数学等でチームティーチングに力を入れている。個別最適な学びの実現のため、生徒一人ひとりのことを考えた声掛けを行っている。オウリングプラス等を活用し、「学び合い」を大切に授業を通年で実施した。各教科・行事に合わせたプリントやForms等を活用し、生徒自身の振り返りの時間を行った。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語の「言葉の特徴や使い方に関する事項」において、全国平均と同様の結果であった。ただし、「事象や行為を表す語彙」の問題に課題がみられた。数学では、「数と式」の問題において課題がみられた。素数やグラフの読み取りの問題において、全国平均と同様の結果であったが、数学的な表現を用いて解答する問題に課題がみられた。
思考・判断・表現	国語の「話すこと・聞くこと」における選択式問題において、全国平均を上回っていた。しかし、同じ領域の記述式の問題において課題がみられた。数学では、「倍数」の問題において全国平均と同様の結果がみられた。一方で、「図形」の問題において課題がみられた。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	数学の「データの活用」において、市平均正答率を下回っていた。しかし、同一集団の経年比較では、昨年からの数値の上昇がみられた。特に、連立方程式や一次関数についての問題は、市の平均を上回っている。社会の「世界と日本の地域構成」において、市平均正答率に近い結果が見られた。ただし、「世界の様々な地域」において課題がみられた。学力と生活習慣等の調査における「分かった点や分からなかった点を見直し、次の学習につなげる」ことができているか。この項目で弱い正の相関が見られる。このことから振り返りを行い、学びに連続性を持たせる取り組みは一定の効果があると考えられる。
思考・判断・表現	国語の「B 書くこと」において、市平均正答率と同様の結果であった。「C 読むこと」において、市平均正答率を下回っていた。理科の「思考・判断・表現」において、市平均正答率と同様の結果であった。特に、エタノールの実験や小瓶のはたらきについて考える問題等は平均を上回っている。しかし、「地球」を柱とする領域において課題がみられる。学力と生活習慣等の調査における、「授業で、自分の考えを伝えるために話の組み立てなどを工夫していますか」という項目で弱い正の相関がみられる。このことから「学び合い」の継続や話し合い活動の充実、一定の効果があり、活動の中で、考えを上手く伝えるために工夫することが重要だと考えられる。

③	中間期報告	中間期見直し	
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	スクールアシスタントが授業に入り、各教科担当と連携を取りながら支援を行った。長期休業中にスタディサブリで課題を設定した。習熟度に応じたプリントも準備して、生徒が自分で選択して取り組みを行っている。	変更なし
思考・判断・表現	B	学級開きや行事等に関連させて、学級活動における話し合い活動を実施した。スクールアシスタントが授業に入り、個別支援を行った。	9月にさいたま市教育委員会の指導主事を招聘して、学級活動における話し合い活動の授業研究と教員研修を行い、生徒への支援につなげていく。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)